

「東日本大震災の復興の現状と震災ボランティア活動についての報告」

2011年3月11日に日本中を震撼させた東日本大震災から2年8ヶ月(2013年11月現在)が経過しました。東北の被災地では津波による震災の爪痕が瓦礫に支配された風景から殺風景な更地になり、その更地が今後どのような風景に変化していくのだろうと、そんな興味に惹かれ今年は計6度、被災地である宮城県の石巻市や南三陸町を中心に訪問させて頂きました。東日本大震災後、2011年6月から2012年8月まで、障害者支援ボランティアとして宮城県で活動していた私は、その期間中に様々な人々と出会う事が出来ました。そんな出会いと東北の温かい人々からのお世話を受けながら、被災地の視察(というか観光ですが)を、今まで被災地に行ったことの無かった大阪の方々と一緒に訪れ、被災地の現状と復興の進捗の状況を確認させて頂きました。私がボランティアとして現地で活動していた頃に比べ、瓦礫から更地へ、視覚的に解り易い現実を目の当たりにしました。「更地」という何もない風景とは対照的に着実に進んでいるとされる「復興」という言葉とのギャップ。被災された方々が時間とともに元気になった人々がいる一方、震災から時間が経ったからこそ生きることの辛さやしんどさが増した方々も多数存在する現実。一応に被災された辛い体験は時間が解決してくれるものではなく、人それぞれであるのと同時に、「更地」になった風景をどのように新しい風景へと描き変えるのかという困難さを、今年の数度の訪問で感じ、今後の「復興」の難しさを考えさせられました。

さて、冒頭から小難しい文章から始まりましたが、ココからは私とその仲間たちが行った「大阪でも出来る被災地障害者支援ボランティア活動」について報告させて頂きます。

2013年8月に「かんさい☆なう」という名の企画を実行しました。宮城県石巻市で活動している「被災地障がい者センター石巻」との共同コラボ企画で、石巻や隣接する東松島市の障害者の方々と大阪に招き、大阪で自立生活をしている障害者の方々と交流や、障害者自立支援をしている福祉事業所の見学や研修をしたり、大阪などの文化を社会体験してみたり、そのような活動を通じて今までに縁のなかった東北と大阪の人々とを繋ぐ企画です。

「かんさい☆なう」の実施期間は2013年8月4日(日)から8日(金)の4泊5日の日程でした。参加されたのは10代中盤から20代前半の5人の障害者の方と親御さんやご兄弟の方々計5組でした。うだるように暑い大阪に東北の方々は耐えられるだろうか。ましてや研修や社会体験などで大阪の街中を朝から晩まで活動出来るのだろうか。当初はそのような心配がありました。そんな心配の予想は外れ、障害者の方々は病気も夏バテもすることなく元気に活動していました。大阪に行くのならあんな場所に行きたい、こんなものを買ったり食べたいなど、参加されるまでに自分の計画を立てていました。その計画と日程に合わせ殆ど交流の無い現地のボランティアと一緒に活動をしました。

石巻では障害者福祉が極めて薄く、ガイドヘルプに関してもヘルパーの人数が少なく、制度が利用できない現実があります。また障害者本人が行きたい場所ややりたいことという自己実現のための制度利用という考えがありません。私が現地で聞いた話では、知的障害者で問題行動が多いとされる方がガイドヘルプの利用を事業所に相談したところ、問題行動が無くなってからガイドヘルプを利用してくださいといわれ、断られたそうです。問題行動を支援するはずの障害者福祉が、事業所の都合に合わせられる

障害者しか利用出来ない現実があります。石巻に限らず地方に行けば、ヘルパーの人数が不足、上記のような事例も多く、結局制度を利用したいが利用できず諦めてしまい、制度利用の声が上がらないために障害者のニーズが社会に反映されず、ますますヘルパーになる担い手が無い。このような負のスパイラルがあります。翻って岸和田市の障害者福祉はどうなのでしょう。障害者の声が社会に反映されているのかどうか。そもそも障害者が声をあげられる状況になっているのかどうか。この問題は古今東西を問わず、現実の問題として考えさせられます。

話を戻しますと、「かんさい☆なう」では、参加すれば何かしてくれるとか、誰かが考えてくれるという企画ではありません。参加する前に自分で考える事が主目的でした。見知らぬ街ではぼ初対面のボランティアという赤の他人と一緒に、限られた時間の中で何が出来るのだろうか。あそこにも行きたいがこれも買いたい。しかしあそこに行けばこれは買えないし、買ってばかりじゃ何処にも行けない。制約された時間。限られたお金。そしてボランティアという赤の他人。すでに大阪に行く以前から問題が山積み。5人全員が悩みながらも考えてくれたと思います。その他の日程もあり、自立している障害者との交流や障害当事者を中心とした日中活動をしている事業所の見学などもありました。5人全員が望んだユニバーサルスタジオジャパンにも遊びに行きました。また、東北のからわざわざ来てくれたので交流がしたいと望む関西の方々の声もあり、歓迎会や送別会などのイベントもあり、もうお腹がいっぱいいっぱい企画内容になりました。

かなり過密なスケジュールのなか、大阪のうだるような暑さを吹き飛ばし活動しました。自分の思い描いた計画通りに出来た人も居れば、自分が思ったほど出来なかった人もいました。欲しかった物を購入し、人気を入れるかどうか分からない飲食店に運良く入れた人もいる一方、ボランティアと息が合わず、自分の思いが伝わらないままやりたい事が出来ずに終わった人もいました。

親御さん達は親の立場として、さまざまな福祉事業所の見学や、障害のある子どもを自立させた親御さんたちとの交流など様々な研修に参加しました。自分の事は自分で決める障害者主体を学び、障害のある子どもは親が責任を持って面倒を見るのではなく、社会に委ね親元から自立させることが、実は親という立場の人間の自立にも繋がる。親も子どももそれぞれが自分らしく生きていける。そのような考え方を少しでも実感できればとの思いの研修内容でした。

スケジュールと参加者一人一人の思いが一杯詰まった濃密な4泊5日の「かんさい☆なう」は様々な心配をよそにあってという間に時間が過ぎてしまいました。この経験を石巻に持ち帰り、今後の活動の一助にして頂ければ何よりも嬉しいですが、また、このような東北と関西との繋がりは参加して頂いたボランティアも含め一人一人の2013年夏のくそ暑く汗臭い記憶とともに、何か胸に残る思い出も残ったのではないのでしょうか。その思い出は一人一人の胸の中にあるので、なんとも形容しがたいのですが、人と人との繋がりの記憶と思い出はこの先何年も何十年も掛かるであろう被災地の「復興」とはなんだろうかを被災者と共に考える証になるものだと信じております。私もその証を持つものとして東北の被災地の「復興」とはなんだろうかと考え続け、出会った方々と障害者の方々と一緒に何年も何十年も繋がります。